第 6 回インターンシップ報告書(最終)

2013年2月3日

東京外国語大学大学院 総合国際学研究科国際協力専攻１年
塚原早織

◆基本情報

派遣機関：経済協力開発機構(Organization for Economic Co-operation and Development: OECD) パリ本部
都市：パリ、フランス
勤務部署:Public Affairs and Communication Directorate(PAC)内Media Division
派遣期間:2012年9月3日-2013年2月28日(予定)

◆業務内容

① 毎朝、新聞記事、テレビ、オンライン上の主要ニュースとOECDの活動に関するニュースを全てスクラップし、事務総長や幹部に配布する冊子“Daily Media Review”（約６０ページ）を作成、配布する。冊子上の言語は、英仏が全体の８～９割。残りが伊、西、独語。
日本語の記事には、英語訳付き。
② １日に３回、OECD内職員＋各国政府代表部に向け、前述のReviewに間に合わない最新ニュースと、マーケット情報を要約し、アップロードする。また、それらを細かく分類し、イントラネット内データベースとしてまとめる。
③ OECDのエコノミストなどによる発表や特別な会議などがある場合には、ニュースの要約や臨時のレビューを作成する。
④ メンバー国や、それ以外の主要国のマスメディア情報をまとめたデータを作成する。

◆近況報告

半年間のOECD広報局でのインターンも、いよいよ、残り１か月を切った。開始前は、小学生以来のフランスでの生活と、初めての国際機関での仕事に、不安も覚えたが、この半年間、大きなトラブルもなく楽しんで仕事に臨めたことは、将来を考える上でも、非常に大きな自信となった。また、先月からはインターン生の後輩もでき、業務を覚え、こなす、だけではなく、教え、理解して

もらう作業も加わったため、より、業務について客観的にとらえることができるようになった。

◆６ヶ月間の目標設定達成度と10点満点評価

① “OECDにおける業務、またOECD内外で働く方々との交流を通して、国際機関で働くことへの理解を深め、将来展望を考える”(8/10)

半年間、OECDで働く方、特に広報局で働く方々と交流し、また自身も働く経験をする中で、国際機関は、理想的な職場環境だとの思いが強くなった。第一に、職員の仕事への集中力がとても高い点を挙げたい。コーヒーブレイクなどで情報交換をする時間も多いが、その分、業務に臨む際の集中力もものすごい。第二に、仕事が私生活まで深く介入してこない点だ。繁忙期を除いては残業もほとんどなく、女性が出産を終えても、当たり前のように職場の第一線に戻る雰囲気がある。第三に、仕事の目的が、営利ではなく、社会や生活をよりよくすることであるため、みなが気持ちのいい顔で仕事をしている点である。これも、国際機関ならではと考える。

一方、広報局以外の方とは、一部の日本人職員の方々を除き、あまりお話をすることができなかったので、組織全体を把握するという点では課題も残った。

② “業務のスピードアップと上司への自己アピール”(8/10)

半年前の業務開始当初と比較し、業務のスピードは格段に上がった。当初の倍の速さとまでは行かないが、徐々に任される仕事が増えたこともかんがみると、思った以上にスピードアップが図れたと考える。また、業務に慣れるにしたがって、その正確度も増した。

一方、自己アピールはまだまだ課題も残る。日本では、意見を言いすぎだと言われると思われるくらい意見を述べても、こちらでは、意見を言わなさすぎだと言われることもままある。引き続き、努力したい。ただ、インターンを通し「日本人らしく」真面目にコツコツやっていることも評価してもらえるので、その点は維持していきたい。

③ “広報局全体の業務の把握”(8/10)

私のインターン先のPACは、大きくPACCOMとPACAFFに分かれている。PACCOMが主に、新聞やテレビ、ラジオ、インターネットなどのマスメディアを相手に仕事をしているのに対し、PACAFFは、イベントを開催したり、OECDへの学生やそのほかの訪問者に対しOECDの活動をＰＲしたりするのが主な業務である。部署

のミーティングや、新年会などのイベントは、PACCOMのみで行われることも多いので、PACAFF全体の業務を把握するまでには至らなかったが、日々の業務の中で、大まかにでも理解することができてよかったと考えている。
　広報の仕事に携わったのは人生で初めての経験だったが、その面白み、また課題を把握でき、大変貴重な半年間となった。

④ “英語スピーキング・リスニング能力とフランス語の語彙力（特に仕事、経済に関する語彙力）向上”(7/10)
　英語のスピーキングとリスニングに関しては、これまで留学経験もなかったので、このインターンが初めての経験となった。最初の２か月はフランス人ばかりの環境だったので、英語力の向上は見られなかったが、それ以降は、イタリア人、スペイン人の同僚が加わり、職場での会話に加え、日々のランチタイムでの会話を重ねることで、格段に向上したと感じている。
　一方、フランス語の語彙力の向上には、まだまだ課題が残る。ある程度、その言語がわかってしまうと、それから更に語学力を伸ばすのは、想像以上に難しいことがわかった。今後も、新聞や文献を読む作業を通じて、語学力を伸ばして行きたい。

⑤ “大学院での研究に向けた情報収集と考察の継続”(5/10)
　業務以外の時間を見つけて、研究も進めたいと考えていたが、思ったように進めることができなかった。業務を正確にこなすことを一番に考え、語学の勉強や、国際ニュースの収集に時間を費やしてしまった点も大きい。
　一方、半年間、広報分野でインターンをするにしたがい、この分野に関する見識を深め、その効果を、方法論のみではない視点から研究したいとの思いが強くなった。具体的な対象分野は検討中だが、今後、時間軸や国などを限定し、研究に挑戦したい。

◆最終報告
　今回のインターンシップを通して想像以上に多くのことを学ぶことができた。
　まず、広報局という職場柄、OECD がどのような国際機関で、何を重視していて、どのような職員が働いているかという全体像を把握することができた。また、日本のマスメディアに比べ、欧米のマスメディアにおける OECD の報道量が格段に多い現実も目の当たりにした。今後の人生における情報収集において、日本語媒体に頼りすぎてはならないと、改めて感じた。

広報局で働く職員の方々は、とても社交的、かつアクティブな方が多く、毎日笑顔で仕事に臨むことができた。日本企業のように、何かと半強制的な飲み会があるわけではなく、新年会はインド料理店でランチだったり、新人職員の歓迎会は廊下でシャンパンを開けるだけだったりと、仕事と私生活のバランスをうまく取っている様子を見習いたいと思った。

今後の課題としては、仕事に対する創造性を養って行くことだ。この半年間のインターンを通し、目の前にある仕事を正確にこなすこと、また業務のスピードアップに取り組むことはできた。一方、マスメディアの分析をする役割を担っているユニットだからこそできる新たな試みを提案できるようになれていれば、さらにインターン生活が充実したのではないかと考える。

最後に、このような素晴らしい機会を与えて下さった先生方や大学院の方々、また受け入れて下さった OECD の PAC の方々に心からの感謝の意を表したい。

12 月から来たスペインからのインターン生と。

半年間、毎日首にぶら下げてきた OECD のモットー。